フライは当時も今も、カナダにおいて新時代を画する偉大な批評家である。彼には文学全般を扱った「恐るべきシンメトリー」(一九四七年)や「批評の解剖」(一九五七年)の秀作があり、なかでもとくに「ブッシュ・ガーデン――カナダのイマジネーションに関するエッセイ」(一九七一年)は高い評価を得ている。

一九五〇年代に入るまで、カナダの文学批評が貧困であった理由のひとつは、批評家たちが発表討論などの実践活動を通してその洞察力を錬磨できるような場、すなわちカナダの文学作品を専門にした雑誌が全く存在しなかったことにある。したがって、一九五九年に学者の作品も作家の作品も掲載するジョージ・ウッドコック編集の批評誌「カナダ文学」が発行されたことは、カナダ文学史上の大転換とされている。それはまさに、真剣な文学時評の始まり(現在ではこの種の雑誌はほかに六種類出されている)であり、一九六〇、七〇年代を明確な伝統をもったカナダ文学の成熟期として歴史に記したのである。

いかなる伝統でも、最終的な評価は、歴史家の参加をまってはじめてなされるものであろう。「カナダ文学」が発刊された六年後の一九六五年に、一群の学者が執筆し、カール・F・クリンクが編集した労作「カナダ文学史」が出版された。一九七六年には第二版が発行され、一九六〇年代、一九七〇年代の創造的高潮期を一冊の本にまとめた。ノースロップ・フライが初版に書いた「結語」は、文学史のもつ時間上、空間上の限界を冷静に算定し、その限界が如何にして創造的に克服されたかを示している点で、おそらくカナダ文学史上最もすぐれた論文であるといえよう。

ジョージ・ウッドコック 雑誌「カナダ文学」の創立者で、その編集長。リックラーやマクレナンに関する本や「Odysseus Ever Returning」(一九七〇年)と題する文学評論集などの著書のほか、「A Choice of Critics」(一九六六年)「The Sixties」(一九六九年)などの編書がある。(本紙十四ページ「ジョージ・ウッドコック――カナダのアナーキスト」を参照)

ケベック文学の現状

ジョルジュ=エベール・ジェルマン

この十年間、ケベックの作家たちには――シャンソン作者、映画制作者と同様に――語るべきことが実にたくさんあった。作家たちは作品の中で、自分の国を探し求め、創造し、記述した。この作業は、生まれてまもない若い文学が、常に最初に取組む仕事だ。「わが小説家の作品を読むことは、われわれの住む世界を読み取るようなものだ」とは、モントリオール大学フランス文学教授であり、ケベックの有力紙「ル・ドゥボワール」の文芸批評家でもあるジル・マルコットの言葉である。

ガブリエル・ロワ
「Enchanted Summer」

事実、ルイ・エモンやフェリックス=アントワーヌ・サバール、リンゲ、クロード=アンリ・グリニョンといった人々の作品を読むと、私の祖父の生きた世界がまざまざと目に浮んでくる。それは、土地への愛着であり、先祖たちの武骨な生きざまである。また、ガブリエル・ロワやロジェ・ルムランの作品を読むと、父の世界が、伝統的文明の終焉と苦痛にみちた都市文明への移行の時代が、眼前に迫ってくる。

フランス系カナダの文学は、一九六〇年代初期に至るまで、カナダ文化の中できわめて辺境の存在であった。ケベックの伝統的なカレッジでは、文学といえば圧倒的にフランス文学であった。コルネーユ、ラシーヌ、ユーゴー、ミュッセ、ボードレール、ランボー、プルースト、それに二〇世紀のカトリック作家(クローデル、ブロイ、モーリヤックその他)など、古今のフランス作家が顔を並べ、私が一九六四年に二〇歳で大学を卒業したときも、〝正規の授業〟ではエミール・ネリガン、ガブリエル・ロワ、イブ・テリヨーといった名前はついぞ耳にしたことがなかった。現実にはテリヨーの素晴しい小説「Agaguk」が、その四年前に

ガブリエル・ロワ